
オモイシンシント

大河内一滴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモイシンシント

【Nコード】

N7937P

【作者名】

大河内一滴

【あらすじ】

寒い季節に起こった日常の一場面。
ちよっぴりせつなく意味不明な物語

「寒っ」

この時期に髪を切ったのは間違いだったと思った。

首元にくる風が容赦なく、なくなった髪の毛の大事さを思い出させてくる。

やっぱり髪なんて切らなければ良かっただろうか？

あんなに思い切ったのに、決心はゆらぐばかりで……

「違う違う！ちょっとうつとおしかったから髪切っただけだし！」

誰に向けたわけでもない言の葉は、どこにも向かわず、小さくなった。

赤崎駅の中では色とりどりのイルミネーションが明るく駅全体を映し出しており、歩く人々の顔もいつもより朗らかに見えるのは、きっと今日という日のせいだろう。カップルが多く感じるのは決して気のせいではなく、あちらこちらで、手を握る映像が目につく。

恨みがましく見てしまうのは自分の手が冷たいままだからだ。

でも本当は羨ましいのだ。

自分でもわかつてる。

コンビニで買ったチョコレートはほろ苦く、暖かい紅茶は、それでも私の心までは温めてくれない。

「やっぱり切らなければよかったかな……」

吐いた息は白く、立ち込める。

さっきまでの美容室での気合はなんだったのだろう。

髪を切れば気分が変わるなんて嘘だ。

別段とても悲しいわけではないけれど、ちっちゃな鬱々感はいつまでも心の隅っこに居座っている。

こういう時、心なんてなければいいと思ってしまう。

こんなになっている原因は、はつきりいつてない。

ただ、しいて言うとしたら今日という日に独りで外を歩いているということだ。

悲しくなるのに、ドラマやイベントなんて必要ないのがわかる。

人は1人でいれば常に悲しくなれるのだから。

駅内を歩いていくと、携帯が鳴る。短い着信音はメールの受信のお知らせだ。

From: 美香

今から皆でカラオケ行くけど来る？

私は受け取ったメールを見ると返信はせずに直接電話をかけた。

「もしもし」

「みんなってだれ？」

「連絡はやっ！みんなってーいつものメンバーとかだよ、ユウとかミサとか」

「そっか……んー今日は気分が乗らないから行かない」

「来てよー何か用事？」

「いやーひーま人だよー」

「……あんた今外にいるの？」

「うん、駅前でぶらぶら中」

「へえーもしかして今からデートとか？」

「もしそうだったら、今あんたと電話してないよ」

「そりやそうか、じゃあ来る気になったら連絡してよね、ちゃんと男も呼んであるよー」

「そんなのいりませーん、じゃあ切るよ」

「いないと意味無いじゃん。またねー」

ツー

ツー

ツー

電話は途切れた。

残ったのは友達の声と集合場所の情報だった。

確かにこういう日はカラオケなんかでパーっとした方がいいかもし

れない。こんなジメジメとした気分もみんなといれば吹き飛んでくれるような気もする。けどなんとなくみんなという気分にはなれない。それに切ったばかりのこの髪をみんなに見られるのはイヤだ。うーんどうしようか。

そう考えながら、迷う足は目的もなくその辺をぶらぶらと歩き回り、しばらく経つと駅前にある広場で止まった。目的のない行動はどうしてこうも重くなるのか。

空は赤から紫へと変化し、だんだんと暗みを重ねていく。依然として街はにぎやかで、明るく、寒いくらいに暖かそうだった。

しばらく携帯を見つめていると雪が降ってきた。

シンシンと

そんな言葉がよく似合うくらいにゆっくり、ゆっくりと地面に落ちていく。

肌に触れる雪の子は一瞬の冷たさを与え、すぐに水へと変わってしまふ。

こんなにすぐに水に変わってしまうのなら何で雪になんてなるのだろっ。

私は自分でも意味のわからないことを考えながら、広場を出ることにした。

決めた。

今日はやっぱり、独りでいよう。

そう決めながら駅へと向かうとまたもや携帯はメールが届いたことを教えてくれた。

しかし画面を見ると、今度は美香からではなかった。

From: 加藤さん

今井さんから聞いたけど、今日来れないって本当？

ドキッ

ちよつとだけ心臓が高鳴った。

せっかく決めたのに足がまた止まってしまった。

だけど

だけど

「……遅いよー」

一言つぶやいてみて、私は携帯を操作する。

ＴＯ：加藤さん

ごめんなさい。

今日はもう夕飯を作ってしまったから、
また今度みんなで遊びに行きましょう。

送信ボタンを押して携帯を閉じる。

バッグの中にしまいこむと再び私は歩き出した。

さて、今日の夕飯はどうしようか。

（後書き）

「冬」をテーマに書いてみたらすっごくわけのわからないものができてしまいました。

一応恋愛ものを書いてみようと思ってみたのですが……経験値の低さがもろにでてる感じです。

指摘とかがありましたらよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7937p/>

オモイシンシント

2011年1月3日23時38分発行